■漢文の訓読

子曰、学而時習之　不亦説乎

これは、『論語』の冒頭の句で、中国でも古典中の古典とされるものである。『古事記』に拠れば、應神天皇の時代に、百済の学者和邇吉師が『論語』を携へて来日したとあるが、これは四世紀末になる。奴国王が金印をもらったのは一世紀の事だから、むしろ遅い位である。

初めは「子曰、学而時習之……」と、今のお経の読み方と同じやうに読んでゐたものであらう。勿論、帰化人から直接学んだ者の中には、中国人と全く同じ発音で読める者もゐたに違ひないが。

しかし、漢字の理解が深まるにつれて、和語を漢字で表記する書法が完成されると、漢文も同じやうに訓読する読み方が始まった、と私は思ふ。

“まなぶ”といふ和語を“学”といふ漢字で書き表し、“学”といふ漢字を見れば“まなぶ”と読んでゐるのであるから、『論語』の“学”だって“まなぶ”と読まない訳がないであらう。

今、我々は「子曰く、学びて時に之を習ふ。亦説しから不乎」と読んでゐるが、この読み方は意外に早くから行はれてゐたのではあるまいか。「花散里之」を訓読するのと、「学而時習之」を訓読するのと、文法の違ひに因る読み方の順序の違ひがあるだけで、あとは全く同じであるから、この時代には、漢文の訓読法は定着してゐたと考へられる。

ただし、「子曰ク、学ビテ而時ニ習フレ之ヲ、不亦説バシカラ乎」といふやうに、返点、送りがなを付けて読むやうになったのは、ずっと後の事であらう。それにはカタカナの発明が無ければならないが、それは奈良時代の末期の事である。